



安 中 散

これは和剤局方の薬方で、「氣門」というのは気うつ、気滞の一連の症候群ということでしょう。「慢性あるいは急性で、胃が痛み・嘔吐がある。口酸水ヲ吐シ、寒邪ノ氣内ニ留滞シ、停積シ（停滞・蓄積した食べ物を消化しない）、脹満、腹脇をヲ攻刺シ、及ビ婦人血氣刺痛ヲ治ス」とあります。これは冷え症で、平素からあまり丈夫でない人が胸やけ症状を訴える場合に考える処方です。しかし、いわゆる逆流性食道炎ではありません。現代医学的に考えても胸やけにはいろいろな要素が入ってきます。

浅田宗伯は「此方世上ニ八癖囊(胃拡張を考えます)ノ主薬トスレドモ、吐水甚シキ者ニハ効果ナシ。痛ミ甚シキ者ヲ治ス。反胃(胃拡張・胃炎の類)ニ用ユルニモ腹痛ヲ目的トスベシ。マタ婦人血氣刺痛ニハ癖囊ヨリ反ツテ効アリ」と言っています。

結局、安中散の適応は気による痛み(気痛)が主たる目標になります。だから、精神的なストレスなどがかかきすぎているような人に対しての痛み、いわゆる機能的な痛みと考えるのがいいかと思います。

冷えによって消化吸収機能が低下し、胃の動きが悪い、そして胃内停水がある、こういった症状が目標です。運動が低下すると胃の代謝も悪くなり、多少つかえ感を感じる、こんな方、実際ありますね。こんな症状の方に与えることになります。

実際には、安中散を単方で与えることは少なく、当帰芍薬散と合方するか、ベースに小柴胡湯や柴胡桂枝湯を出しながら、適宜安中散を併用することが多いと思います。安中散だけを飲んでおけば、病気が根本的によくなるのではなく、漢方の基本的な考え方「標（症状）と本（病因）」たとえば、胃痛は「標」になります。それを来たしている「本」は、それぞれ異なるわけです。そうみていくと、「標」に使える薬方としての安中散、これは一時的には使えるが、これで「本」まで治すのは難しい薬方です。「本」を治すには、柴胡剤あるいは六君子湯などの薬方が必要でしょう。



安中散の主たる生薬は延

胡索（えんごさく）（写真は京都・武田薬品薬草園提供）で、これは「体の上下の諸痛を治す」と言われ、痛みにも最も有効なものです。また「筋肉拘攣を治す」とも言われています。痛みに関して疼痛閾値を高めます。その意味で鎮痛作用があります。中枢性の鎮静効果があり、人によっては「眠たい」と感じる方もおられます。延胡索の成分としては、多くのアルカロイドが分離されています。Corydaline、Tetrahydro-palmatin、Protopine など十数種のアルカロイドが知られています。疼痛閾値を高める作用は、煎剤よりも末（散）、アルコール抽出エキスが有効です。中枢的に催眠作用があると同時に、末梢的には抗コリン剤として作用しますが、古くから浄血作用があるとして、婦人の血の道症にも用いられます。中国では、延胡索だけの錠剤があり、私もかつて使用した経験がありますが、虚証で神経が過敏な方の胃の痛みに対しては、ブスコパンよりも効果的だった印象をもっています。臨床的に鎮痛だけでなく、鎮静作用が意外に強い、そういう印象をもってます。落ちついた、ゆったりとし

た気持ちになることが大切なのでしょう。安中散は、非常に優れた薬効をもつていますが、いま申しましたようにこれだけで病気を治しきることにはならないようです。これを注意しておいていただきたいと思います。病位からみて、これは少陽病位、虚証に属する薬方です。